

炎に見る心の像

日栄 一雅

メディア作品

素材：システム部：コンピューター、プロジェクター、カメラ、ろうそく、木、紙、鉄

ろうそくの炎を見つめていると、その中に一瞬別のイメージが浮かぶ時があります。私達が外部の世界を見るとき、脳内にあるイメージと照らし合わせながら対象を認識します。言い換えれば、脳は様々な経験によって蓄積されたイメージを元にテンプレートを作り、高速なパターン認識を瞬時に行っています。

たとえば、私たちが透明なガラスを視覚で認識できるのも、五感を通して得られた経験により頭の中にガラスというイメージを作り、そのイメージと今見ている視覚情報とを照合し物体を認識している為です。

この作品は、今、目の前にあるろうそくの炎を線対称に写し出し、コマ送りする事で脳内にあるイメージを引き出します。

ふとした瞬間に見えるイメージは、炎を通して見える自分の内部のイメージ、そして外部に見える世界はそのイメージによってフィルタリングされた極めて主観的な世界なのかもしれません。

この作品は、自然科学機構生理学研究所小林英彦教授の脳内での視知覚の働きの研究を基に製作しています。また、ろうそくは岡崎市の磯辺ろうそくさんの和ろうそくを使用しています。